

## 『万葉人の心と、現代人の心』～科学技術の進歩は人間性の進歩をもたらしたか～

令和2年11月10日 山田英二（色染昭35年卒）

### § 1. はじめに：

小説伊勢物語「業平」（高橋のぶ子著）を読んでいたところ、互いに安否を気遣って消息を通じ合う下記【Q1】【A1】の「相聞歌」に出会った。

【Q1】 老いぬれば さらぬ別れの ありといえは いよいよ見まく ほしき君かな  
（意味：歳を取ると避ける事が出来ない別れがあると言いますが、そう思うと、いよいよあなたに会いたいという気持ちが強くなります） ☆在原業平の母

【A1】 世の中に さらぬ別れの なくもがな 千代とも祈る 人の子のため  
（意味：避けて通れぬ別れなどあってほしくない、人の子である私の為に、千年の世も生きてほしいと祈るばかりです） ☆在原業平

上記【Q1】の歌の内容は正に現在の小生の心境をズバリ言い当てており、特に最近ではコロナ禍の為、会いたくても会えない「君」が多く存在し、強く共感したので、憚り乍ら、万葉時代の人々の心の動きと、現代人の心（人間性）について考えてみた。

### § 2. 万葉集とは：

令和の元号が万葉集の梅花の歌32首の題詞にある「初春の令月にして、気淑く風和らぐ」から採用された為、万葉への関心が高まっているという。

万葉集は奈良時代末期に成立した日本最古の和歌集で、約4,500首が掲載されており、分類すると①相聞歌（親子、兄弟姉妹、親友、恋人の歌）、②挽歌（死を悼む歌）、③雑歌（行幸、遊宴、旅、自然にまつわる歌など）の3つに分類され、相聞歌が最も多い。

万葉集の作者は、天皇や宮廷の詩人、武人や農民、乞食にいたるまで幅広く集められており、人が生を受けてから死ぬまでのあらゆる場面における人間関係が詠まれた歌集である。又、人々が自然と共に生きていた時代の中で、自然が豊かに詠み込まれているので、当時の人々の心の動きを如実に物語っており、古代人の魂の叫びとも言える。

### § 3. 万葉時代の相聞歌の例：

☆相手の安否を気遣ったり、恋情を訴える「相聞歌」は万葉集には数多く記載されており、例えば下記のようなやり取りの例がある。

【Q2】 あかねさす 紫野行き 標野行き 野守は見ずや 君が袖振る ☆額田王

【A2】 紫の にほへる妹を 憎くあらば 人妻ゆえに 我れ恋ひめやも ☆大海人の皇子

【Q3】 塵泥の 数にもあらぬ 我ゆえに 思いわぶらむ 妹が悲しさ ☆中臣朝臣宅守

【A3】 君が行く 道の長きを 繰り畳ね 焼き滅ぼさむ 天の火がも ☆狭野弟上娘子

【Q4】 あしひきの 山の雫に 妹まつと われ立ち濡れぬ 山のしづくに ☆大津皇子

【A4】 吾を待つと 君が濡れけむ あしひきの 山の雫に ならましものを ☆石川郎女

【Q5】 鳴る神の しましともよし さし曇り 雨も降らぬか 君を留めむ ☆作者不詳

【A5】 鳴る神の しましともよし 降らずとも 我は留まらむ 妹し留めば ☆作者不詳

§ 4. 人を想い慕う歌の例：

1. 銀も 金も玉も なにせむに 優れる宝 子に及かめやも ☆山上憶良  
【意味】大切なのは金銀財宝ではない、人の心である。子に勝る宝などありえない。  
この歌は人類普遍の価値を詠っており、欲望に心を奪われて、家族愛を見失う  
事を戒めている。
2. 君がため 春の野に出でて 若菜つむ わが衣手に 雪はふりつつ ☆光孝天皇
3. 君が行く 海辺の宿に 霧立たば 我が立ち嘆く 息と知りませ ☆作者不詳
4. 春の苑 紅におう 桃の花 下照る道に 出で立つ娘子 ☆大伴家持
5. 春過ぎて 夏来にけらし 白妙の ころもほすてう 天のかぐ山 ☆持統天皇

§ 5. 自然を愛でる歌の例：

1. あをによし 奈良の都は 咲く花の 薫ふがごとく 今盛りなり ☆小野老
2. 難波津を 漕ぎ出でて見れば 神さぶる 生駒高嶺に 雲そたなびく ☆大田部三成
3. 天の原 ふりさけ見れば 春日なる 三笠の山に いでし月かも ☆阿倍仲麻呂
4. 田子の浦に 打出て見れば 白妙の 富士の高嶺に 雪は降りつつ ☆山部赤人
5. ちはやぶる 神代も聞かず 竜田川 からくれないに 水くくるとは ☆在原業平
6. 石ばしる 垂水の上の さ蕨の 萌えいする 春になりけるかも ☆志貴皇子
7. 久方の 光のどけき 春の日に しづこころなく 花の散るらむ ☆紀友則
8. ひとはいざ 心もしらず 故郷は 花ぞむかしの 香に匂ひける ☆紀貫之
9. 古への 奈良の都の 八重桜 けふ九重に にほひぬるかな ☆伊勢大輔

§ 6. 万葉時代の人々の心と、現代人の心：

万葉集は、前記した有名な例にみる様に、自然を畏怖、或いは賛美する内容で、写實的、色彩的、動的表現を行った「叙事詩的」なものと、憧憬、願望、空想、悲嘆、愛情表現などの「抒情詩的」なものを含み、万葉時代の日本人の感性と人間性や精神性（心の動き）を如実に、且つ、豊かに物語っている内容と言えよう。

さて、小生はその道の学者でも研究者でもないので、万葉時代に始まる人間精神の進歩史、又は、退廃史について考証する資格も能力もない。その事は承知の上で、人間精神の発達について、浅薄な内容ではあるが、敢えて私見を述べてみたい。

人間は年を重ねる程に人生経験が豊かになり、修行するチャンスも増える筈なので、高齢になるほど、如来や菩薩に近い老人が増えてくると思いきや、決してそうはなっていないのが現実だと思う。

自分自身の事を振り返ると、若い頃の方がむしろ、心が純粹で、謙虚で、くそ真面目で、馬鹿正直であったと思う。真面目で正直なのは良いが、「くそ」と「馬鹿」が付くのは「過ぎたるは及ばざるが如し」と忠告された事があるくらいである。

それとよく似た現象で、万葉時代から千数百年を経た現代人の心（人間精神・人間性）は、万葉時代の人々に比べて進歩・発達していると言えるのであろうか？つかみどころのない心の問題ではあるが、決してそうはなっていないと思われる。

文明開化と称して日本は明治時代、西欧文明を取り入れ、物質的に豊かになった。

戦後も科学技術の進歩、新しい機械の発明・発達、社会制度の整備など、ソフト・ハード両面からの進歩に基づく高度成長によって、経済的、物質的に豊かになった。かかる文明進歩の恩恵を受け、生活レベルが格段に向上したのは事実であろう。

しかし、世界に目を向けると、人間精神の退廃の象徴とも言える国家間、民族間、部族間、宗教間の激しい抗争や、殺戮が繰り返されているのは何故だろうか？サミュエル・ハンチントンによって「文明の衝突」も指摘されている。人間は苦い経験に学ばないのだろうか？

科学技術の進歩は、人間性の進歩を支援するどころか、逆に人間性の退廃をもたらしているのではないかと疑問がわく。例えば、中国の現状は「貧すれば鈍する」ならまだしも、「富すれども益々鈍する」となっている。技術が進歩し富を得、国力が強化され豊かになるにつれて覇権主義が台頭し、人権を蹂躪し、他国への侵略的横暴行為が多くなっており、心の退廃が進みつつあるかに見受けられる。それは一部の政治家に限られる問題であろうか？

この心の問題について、著名人の見解を以下の通り幾つか列挙する。

#### § 7. 科学技術の進歩と、心の進歩・退廃に関する著名人の見解：

- ①【京都府大・岡本隆司教授】 中国は今まで無理をして西側の価値観に合わせてきたが、今や西側的な価値観（自由と民主主義）を捨て、昔から長年続いてきた独裁制や皇帝制に回帰している。その結果、香港、南シナ海、尖閣諸島、ウイグル族等の問題が顕在化してきた。現在の中国共産党政権は、ひとつの王朝みたいなものである。清朝の放任主義はアヘン戦争に繋がったが、登小平の改革開放を彷彿とさせ、最近、緩んだタガを締める必要があるとして、現政権が強権的に介入を始めた結果、前記の問題を生じている。我々日本人は民主主義に甘やかされてきたので皇帝や独裁政治は過去のもの、あってはならないものと考えがちであるが、中国では実質的にそれがずっと続いてきた。共産党が一つの王朝だとすれば、易姓革命は繰り返すのだろうか、新たな疑問である。
- ②【作家・養老孟司】 私達の社会はシステムの肥大化で右往左往する人間で一杯だ。まるで浮き草の様に情報量につられて、あっち行ったりこっち行ったり。お金は物を購入できるが、生産は出来ない。そのお金が独り歩きしている。科学の進歩は空間の破壊を押し進めたり、道徳の退廃をもたらしたりで、今やバラ色の世界は望めない。
- ③【作家・佐藤愛子】 科学技術の進歩は、我々の暮らしを豊かにしたかもしれないが、それと引き換えに、かって我々の中にあった謙虚さ、感謝、我慢等の精神力を摩滅させていく。もう科学の進歩はこの辺でいい。更に文明を進歩させる必要はない。進歩が必要だとしたら、それは人間の精神力である。
- ④【脳科学者・中野信子】 人間の本质は時代を経ても変わらない。歴史は繰り返すと言うが、正にそうになっている。人間の本质の中の一つに「妬み」がある。失職するとひどく落ち込むのは「いらぬ人間」と烙印を押された様な気になるからであって、お金の問題ではなく、人間の心（尊厳）の問題である。
- ⑤【東大大学院情報理工学系研究科長・坂井修一】  
ローマクラブは 1970 年代の初頭に「成長の限界」を主張しているし、環境汚染、原発

事故、繰り返される経済危機、戦争・紛争、サイバーテロ、インターネットを介したプライバシー侵害など、時代と共に悪化する物事も多い。科学技術の進歩がそのまま人間の進歩に重ならない事は、世の中で繰り返し主張されているところであるが、科学技術をどう制御していけばよいかについては、実効性の高い議論がなされているとは言い難い。人間にとって真の進歩とは何か、それはどうやったら達成できるのかを論じなければならない。

- ⑥【作家・夏目漱石】私達の生活を便利にする科学技術であるが、その進歩の速さに比べて、人間の心がなござりになってきているかもしれない。現代では科学万能主義となりつつあり、唯物に偏りすぎていて、人間の心の諸相への探求や、大切な道徳心が阻害され、それが道徳退廃に繋がっている。
- ⑦【ウルグアイ元大統領・ホセ・ムカヒ】世界で一番貧しい大統領という称号を受けているが、みんな誤解している。私が思う貧しい人とは、限りない欲望を持ち、いくらあっても満足しない人の事だ。私は少しのモノで満足して生きている。質素なだけで、貧しくはない。簡素に生きていけば人は自由なのだ。このまま大量消費と資源の浪費を続け、自然を攻撃しては地球がもたない。生き方から変えていこうと言いたい。簡素な生き方は日本人にも響くと思う。近所に日本からきた農業移民が沢山いた。みんな勤勉で、僅かな持ち物でも満ち足りて暮らしていた。
- ファナチズム（熱狂）は危ない。左であれ右であれ、宗教であれ、狂信は必ず異質なものへの憎しみを生む。憎しみの上に善きものは決して築けない。異質なものにも寛容であって初めて人は幸せに生きる事ができる。
- ⑧【哲学者、M・ガブリエル、FUNAGEN ノート】近代科学で何でもできるという世界像のせいで長きにわたって多大の心の退廃をもたらした。人間は科学によって価値を作り出すにしても、最終的にはその価値に値段を付け、それを売って儲けたりするのが中心となる。結果的に道徳的真理や、人の感性迄無視してしまう事になる。
- ⑨【ドイツ哲学者・ユルゲン・ハーバマス】著書「人間の将来とバイオエシックス」の中で、クローン人間を含め人間に対する遺伝子操作に対して強く反対してきた。その論拠は、偶然によって操られている種の進化が遺伝子工学の介入可能な分野となるにつれて、即ち、我々が責任を持つべき行為となるにつれて、作られたものと、自然に生まれてきたもの、という生活世界では依然としてはっきりと別れているカテゴリーが、非区分化してくる。今まで技術が向かう先は、人間以外のものであった。ところがバイオテクノロジーによって、その技術は人間に向かい始めた。自然を変える技術だったものが、人間という自然を変える様になり始めた。

## § 8. 人間の精神性を高める為に何を為すべきか：

科学技術の進歩は、人々の生活を物質的に豊かにし、地球上の人口爆発（1900年→16億、2000年→60億人）を支え、平均寿命を伸ばし、経済面の幸せ向上に寄与してきたのは事実であろう。その点は感謝している人々が多いと思う。

しかし、地球上には 8.2 億人の飢餓状態の人々が居り、20 億人が深刻な食糧不足に

あるにも拘わらず、有用な食糧を年間 13 億トン廃棄しており、全世界の食品の 1/3 が捨てられているという矛盾が存在する。食品ロスは、環境破壊、資源枯渇、貧困改善の停滞など、様々な問題を含んでいるにも拘らず有効な解決策が実行されない。

人間精神の退廃を示す例は、身近なものから世界的なものまで大小様々あるが、幾つか列挙すると、「核兵器や化学兵器の製造」「政敵の粛清」「麻薬の蔓延」「他国への侵略」「テロによる無差別殺人」「人種差別」「いじめ、虐待」「強盗、殺人」「DV、詐欺、脅迫」「賄賂」「公然と嘘をつく」「約束不履行」「人権侵害」「サイバーテロ」「振り込め詐欺」「学級崩壊」など、数え上げればきりが無いほど、新種の悪行や犯罪が平然と、且つ、絶え間なく行われている。

個々人でみると、悟りを開いて如来の境地に達した人、或いは人類の為に自己犠牲心を発揮して、全てを捧げている人々が存在する一方で、社会全体としてみた場合、人類の心の進化は停滞、或いは退廃している様に見受けられる。

政、官、学、財を問わず、私利私欲の為に動き、利己的にしか物事を考えられない狭量な人々が極めて多いと言わざるを得ない。

この心の病が進行すれば、最悪のケース、第 3 次世界大戦が勃発して、仮に原爆が多数使われると、全世界を席捲する環境破壊によって、人類は恐竜が絶滅したと同じ運命をたどる可能性がある。TNT 爆薬の 50 メガトンに相当する原爆（広島型原爆の 1,500 倍の威力を持つと言われる）の開発に携わった人々は、科学者としては優秀かもしれないが、心は腐っていると看做さなければならない。しからばどうすればこの問題は解決できるのか？この難問に対する解があれば教えて頂きたいものである。

## § 9. “幸せ国家・ブータン” は心の難問の解になり得るか？：

世界一幸せな国と言われた小国「ブータン」の幸せの理由は何なのか？国民の大多数が幸せを感じる国では、心の退廃に基づく悪行や犯罪は少ないと考えられ、「ブータン」の様な国造りを目指すのも人間性を高め、悪行を減らす為の解決策の一つかもしれない。何故ブータンは幸せなのか、3つの理由が挙げられている。

- 【A】GDP (Gross Domestic Product) ではなく、GNH (Gross National Happiness・国民総幸福量) を重視、経済的な豊かさではなく、精神的な豊かさを重んじる（この項は山上憶良の歌「銀も 金も玉も なにせむに・・・」の心に通じている）。
- 【B】足る事による幸せではなく、当たり前前の生活を送れる事の幸せ、即ち、一日 3 食食べられ、寝る所があり、着るものがあると言う安心感、それだけで満ち足りていて幸福だと思える精神状態の人が多い。
- 【C】幸せの基準は国家ではなく、個人、家庭にある。国民の幸せの為に国家が先ず幸せになるとは考えない。

幸せの定義を「心が満ち足りた状態」とすれば、「ブータン人」が大切にしている 3 つの項目と同義であり、この 3 つの理由には強い共感を覚える。

「ブータン人」が大切にしている「利他の心」や、周囲の人々が家族の様に寄り合い、助け合っている環境が「ブータン人」を幸福にする秘訣と考えられている様である。

「ブータン」の様な国造りを模範にする事が人間性を高める事に繋がるのであろうが、衣食住すら満足に得られない極貧で飢餓状態の人々が居る一方で、食品ロスにお構いなしの贅沢三昧な生活に馴れ親しんだ人々が存在する。又、「歴史」や「文化」や「宗教」が異なれば、「真理」や「善悪」の判断が違って来る事を考えると、全世界の人々が一斉に心を入れ替えて、ブータンの様に物質的豊かさより精神的豊かさを追求する国造りをする事は極めて困難と考えられる。

しかし、国連を中心に、この難問に知恵を絞って答えを出さない限り人類の明るい未来はないと言わざるを得ない。

## § 10. 人類の現状と未来に対する松本紘・元京都大学総長のご提言：

松本紘・元京大総長は「人類文明の見直しと未来」（人間は果たしてうまく進化できたか）と題する講演の中で、地球の現状と問題点を挙げ、地球を救う為の学問のあり方について述べておられる。心の問題解決にとって貴重なご提言なので、要点を紹介する。

### 【1】地球が抱える問題：

★人口爆発＋豊かさの追求 ⇒ 資源枯渇＋環境問題 ⇒ 滅亡の追求

### 【2】科学技術の急速な発展の一方で発生した問題と課題：

[現状] ★豊かな社会、便利な社会、高速情報通信社会、

★生き方、価値観の急激な変化（ゲメインシャフトからゲゼルシャフトへ）

★資源エネルギーの大量消費、建設と破壊、

⇒⇒⇒

[問題点]★人口爆発（2050年に90億人）、ゲーム感覚の戦争、殺戮、

★環境問題の重症化、資源・エネルギー・食料・水の枯渇、

★感染危機（パンデミック）、BSE、

★グローバル化とITの深化（国際的相互依存）、

★金融資本主義、貧富の格差拡大、貧困、

⇒⇒⇒

[人類の課題]★将来を見据えない、読めない現代人、

★社会、世界を見ようとしない自己中心主義、

★人類の英知の結晶であるべき学問が人類の複合的課題に対応しきれてない。

★先端の“枝葉”だけでなく“幹”を理解できる人材を育成する必要がある。

### 【3】生存学（Survivable）の必要性：

★今、学術と我々の知恵は、人類を“生存”へと導かなければならない。

★欲望の暴走と抑制。

★「科学技術」と「こころ・精神文化」の調和が必要。

★「日本的調和のこころ」「東洋的共存の哲学」が重要。

#### 【4】これからの学問（科学）の在り方⇒「生存学」

★「欲望の抑制」を学問する。

★「科学技術が人類を幸せにするか」を学問する。

★「今の学問体系が人類を救うか」を学問する。

※次の時代に必要な人材を今から育てる！“教育”から“育人”へ！

※人類の生き残りの為に、欲望の暴走を抑える必要がある。

#### § 1 1. おわりに：

万葉集で歌われている心情が、現在の自分の心情と一致している事に深く感銘を受けた。

その感動に触発されて、万葉時代の人々の心（人間性、精神性）が、この千数百年を経て、どれ程進歩したのか、今も昔も変わらないのか、或いは退廃したのではないかと、この疑問を持ったので、浅薄で軽率とは思いながらも、敢えてこの難問に挑戦してみた。

その結果、個人差や国別にも差があって、一概に言えないが、現在の人類には心が退廃した人々が多く存在し、指導的立場にある政治家や学者にも心の退廃が目立つ。このまま放置すると近い将来、人類にとって容易ならざる事態が発生する可能性があると感じた。

心の問題を「理性」（感情に走らず道理に基づいて考え判断する能力）と「感性」（感動的刺激や印象を受け入れ、反応する能力、感受性）に分けて考えると、

「理性」（教科で言うと算数、理科、社会等）の進歩は、科学技術の進歩発達に寄与したが、それが悪知恵や悪意に結びつくと、進歩ではなく退廃となって現れる。

一方、「感性」（芸術性）は、万葉時代の人々に比べて現代人は衰えている様に思われる。その原因は「感性」を育む教育が「理性」を育む教育に比べて二次的に扱われているからではないだろうか。

日本には、「日本の形を作った先駆者・聖徳太子」、「密教の修行を説いた“十住心論”の著者・空海」、「浄土真宗の祖・親鸞」、「曹洞宗の祖・道元」、「法華宗の祖・日蓮」、「能の完成者・世阿弥」、「わびに命をかけた・千利休」、「武士道の著者・新渡戸稲造」、「“禅”の著者・鈴木大拙」、「日本民俗学の創始者・柳田国男」、「明治の啓蒙思想家・福沢諭吉」、「日本哲学の父・西田幾多郎」、その他数多くの優れた哲学者が輩出しており、心に関する教材には事欠かない。

せめて日本に於いては「感性」に関わる教育（絵画、音楽、体育、文学、宗教、道徳、歌舞伎、能、茶道、花道、剣道、柔道、弓道等）にもっと注力し、物質的豊かさより精神的豊かさの大切さを体得した若者を増やす事によって、ブータンの様な幸せいっぱい国造りを目指すべきではないだろうか。

松本紘・元京都大学総長は、現状の課題として「科学技術」と「こころ・精神文化」の調和が必要とされたが、その真意は「科学技術」に「こころ」が入魂されてないという事ではないだろうか。その点、「感性」を磨く教育によって、即ち、唯物に偏った教育を是正する事によって、この問題は解決の方向に向かうのではないかと考えられる。以上



京都、竜安寺の蹲踞 『吾唯足知』

I earnestly sense satisfaction. (§ 10より引用)

【参考引用文献】

「小説伊勢物語・業平」高橋のぶ子著、日本経済新聞社

「教養としての日本哲学」小川仁志著、(株)PHP

「いま世界の哲学者が考えていること」岡本裕一朗著、ダイヤモンド社

「入門 万葉集」上野 誠著、筑摩書房

「万葉集から古代を読みとく」上野 誠著 筑摩書房

「理性と感性」創価大学教育学部教授 小山 満